

主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善

～ 学びの流れを見通して単元をデザインする ～

聖籠町立蓮野小学校

1 NIE 実践のねらい

昨年度は、一部の児童の発言によって授業が進行しているという課題を改善するために、研究主題を「主体的に学ぶ子どもの育成」として研究に取り組んだ。特に「学習課題づくりにおける新聞の活用」に重点をおき、授業改善に取り組んできた。

その成果として確認できたことは、新聞を用いて学習に関連する実際の出来事や、児童にとって関心のある話題等を提示したり、写真から記事の内容を考えさせたりするなど、教師が学習課題成立までの流れを工夫することで児童の学ぶ意欲が喚起され、主体的に課題解決に向かうようになるということである。

学習課題成立までの流れを工夫する「一単位時間の授業の充実」という昨年度の研究の成果を踏まえながら、今年度はさらに一歩進め、「単元全体の学習の充実」へと視野を広げ、授業改善に取り組んでいく必要があると考えた。そこで、児童が単元を貫いて主体的・対話的で深い学びに向かうための新聞の活用方法について研究することとした。

2 今年度の実践の概要

(1) 環境整備

校内に NIE コーナーを設け、各種新聞を自由に見られるように、閲覧台やテーブルを設置した。階段の壁にも新聞記事を掲示し、日常的に目に触れるようにした。

また、学年掲示コーナーを設け、学年の取組を紹介できるようにしたり、「コメントしてみまショー」のコーナーを設け、取り上げられた新聞記事に自由にコメントを残せるようにしたりした。

(2) 児童会との連携

「NIE 委員会」を発足し、児童主体の NIE の取組を目指してきた。児童と一緒に環境整備をしたり、昼の放送で「金曜新聞ショー」のコーナーを設け、記事の紹介をし



NIE コーナー

新聞を読んだり、記事にコメントを残したりできるコーナー。

たりした。

また、NIE 委員会で異学年遊びを計画、実施した。新聞に親しむとともに、異学年交流を図った。



異学年遊び

新聞を使った様々な遊びを計画、実施。

金曜新聞ショー

気になる記事を選び、昼の放送で紹介。

(3) NIE タイムの設定

毎週木曜日に 10 分間、新聞に触れ、読む機会を確保した。低学年は新聞に親しむところから始め、中・高学年は新聞記事を読み込み、それに対して意見を交流するなど、学年に応じた取組を行った。



(4) 校内研修

5月に研究全体会を実施し、今年度の研修の方針を全職員で確認した。6月に学年部検討会を実施し、今年度の公開授業の構想に着手した。その後、7月に研推による提案授業を行い、全職員で協議会をした。

7月に新潟日報社木村隆様を講師にお迎えし、「新聞の見方」について講義していただいた。新聞の構成や新聞から必要な情報を素早く得る見方などを教えていただき、新聞についてより深く知ることができた。

その後、学年部による指導案検討会を重ね、出来上がった指導案につい

て新潟県 NIE アドバイザーの方々にご指導いただきました。低学年部は村上市立神納小学校校長小池満喜子様、中学年部は新発田市立加治川小学校教頭高澤元様、高学年部は新発田市立豊浦小学校教頭関慎太郎様からご指導いただきました。

10月に、公開授業研修を実施した。学年で1つの単元デザインについて協議・検討を重ね、担任それぞれが授業公開を行った。

11月21日には、NIE 実践委嘱校として、2年目の研究発表会を開催した。校外から60名以上が参加して下さり、授業について協議することができた。



〈研修一覧〉

| | | |
|-----|-----|---|
| 4月 | 4日 | ○研究全体会「蓮野小の研究について」 |
| | 9日 | ○児童会 NIE委員会の発足 |
| | 23日 | ○NIEネットワーク部会に参加 ○児童に「新聞に関するアンケート」実施 |
| 5月 | 2日 | ○研究全体会 |
| | 8日 | ○全校NIEタイムスタート |
| 6月 | 16日 | ○学年部検討会 |
| 7月 | 14日 | ○提案授業 6年1組 社会科 「聖籠町の未来を考えよう ～税金と政治が支える私たちの暮らし～」 |
| | 30日 | ○新聞講座「新聞の見方」 講師 新潟日報社 木村 隆 様 |
| | 31日 | ○学年部検討会 |
| 8月 | 20日 | ○学年部指導案検討会 |
| | 22日 | ○研究全体会 |
| | 26日 | ○学年部指導案検討会 |
| 9月 | | ○指導者の先生からのご指導 |
| | 22日 | ○学年部指導案検討会 |
| 10月 | 17日 | ○NIE研究発表会指導案完成 |
| | 20日 | ○公開授業研修 1年2組 道徳科「ほかの国の人たちと」 |
| | 21日 | ○公開授業研修 3年1組 国語科「ちいちゃんのかげおくり」 |

| | | |
|-----|-----|--|
| | 29日 | ○公開授業研修 2年2組 生活科「秋はどこにやってきた」 |
| 11月 | 4日 | ○公開授業研修 2年1組 生活科「秋はどこにやってきた」 |
| | 14日 | ○公開授業研修 4年1組 総合的な学習の時間 「笑顔を届けよう！服のチカラプロジェクト」 |
| | 21日 | ○NIE 研究発表会 1年1組 道徳科「ほかの国の人たちと」 4年2組 総合的な学習の時間 「笑顔を届けよう！服のチカラプロジェクト」 5年1組 社会科 「未来をつくり出す工業生産 工業生産の今と未来」 |

4 実践例

(1) 4年2組 総合的な学習の時間 授業者：教諭 藤井 武史

単元名「笑顔を届けよう！服のチカラプロジェクト」

① 本時のねらい (21/28 時間)

これまでの自分たちの活動を振り返り、新たに提示された資料を読み解き、話し合う活動を通して、自分たちの取組について、一過性のもので終わらせてはいけないという思いをもち、そのために必要な活動を考えることができる。

② 使用した新聞記事

「支援届けきれず限界露呈」新潟日報 2023年3月19日

「集めた古着難民の子へ」新潟日報 2025年10月23日

「難民支援「私の使命」」新潟日報 2023年12月13日



③ 主な手立て

ア 全体対話の中からの課題提示

本時における児童の学びの流れを最大限考慮し、全体対話の中で生まれるであろうキーワードを事前に設定した。その上で、児童と

の対話と動画視聴を通して課題を設定した。

イ 新聞記事の活用

世界において難民と呼ばれる人たちの人数が記載されている記事、または、難民がどのようなことに困っているのか、困窮が伝わるような記事を提示することで、「一過性のもので終わらせてはいけないのではないか」という思いをもてるようにした。

ウ 協働的な学習活動の設定

グループ活動の場を設けた。その際、ICT を活用してノートを共有しながら考えを出し合わせることで話し合いを活発化させ、児童の話し合いが協働的に進むようにした。

④ 授業の実際

- これまでの活動を振り返りながらスライド視聴を進めた。スライドの中で現地の難民が実際に服をもらって喜んでいる様子や、現地でボランティア活動にかかわっている人の言葉を時間をかけて取り上げたことで、児童が現地の人たちへ思いを馳せる様子が見られた。その後、児童から「まだまだ足りない」「もっと協力した方がよい」という言葉がスムーズに出てきた。全体対話の中で活発に児童から意見が出たが、学級全員が発言をしたわけではなかった。教師対児童の関係から、児童対児童の関係を増やし、児童同士の対話を充実させることが課題である。



- 新聞記事を提示した際、世界の難民の数を隠して子どもたちへ提示したことで、自分たちが集めた服の数と世界の難民の数を比べることができた。提示した写真には世界で困窮している人たちの写真も載っており、その写真をもう少し有効に使えたのではないかという意見をいただいた。「人は、見たいものを見る」という観点から、見出しや写真をもっと効果的に活用しながら、児童の考えを巡らせていくこともできたかもしれない。



産がこのまま増え続けていいのだろうか？」と問うことで、多角的な視点から考えることができるようにした。

イ 新聞記事の活用

中小工場と海外が協力しているという内容の新聞記事を活用して、工業の発展のために、海外生産と中小工場とのバランスや、協力の必要性に気付けるようにした。

ウ 根拠をもって話し合いをするための資料の提示

問いに対して、話し合いを行う。その際に、資料の提示を行うことで、根拠をもって、自分の意見が述べることができるようにした。

④授業の実際

- ・ 本時で扱ったテーマは5年生にとって高度な判断を要するものであったが、教室内では主体的かつ熱量のある活発な議論が展開された。議論が深まりを見せた最適なタイミングで、新聞記事を提示した。記事の内容は、児童が抱いていた「問い」と合致しており、情報の空白を埋めるタイミングでの提示をすることができた。児童は必要な情報を得ようと記事を真剣に読み込み、重要な箇所を線を引くなど、これまでのNIE活動で培ってきた情報収集能力を存分に発揮した。特筆すべきは、記事を通じて「企業や海外が協力している」という事実を知った際、児童の中に驚きや発見が生まれ、既存の認識が拡張されたことである。
- ・ 本時では授業者側から課題を提示したが、本来であれば児童自身の声の中から課題を整理し、立ち上げていくプロセスが必要であった。教師が主導するのではなく、児童の対話の中から「問い」が生まれる環境をいかに構築するかが課題である。
- ・ 本時の議論において、無理に「AかBか」の二択の結論を出す必要があったのかという点も検討の余地があった。結論の是非よりも、授業を通じて児童の思考にどのような「変化」や「深まり」が生じたのか、その変容のプロセスそのものを価値付ける評価の視点が重要である。また、終末における「まとめ」が教師の意図を汲んだも



のに留まらず、真に「児童のまとめ」として構成されていたかについても、問い直す必要があった。

- ・ 本実践を通じて、NIEは単なる情報活用のスキル習得に留まらず、新聞記事という客観的な情報が、児童にとって社会的事象を多角的に解釈するための有力な手立てとなることが分かった。今後は、課題成立までのプロセスを児童へ委ねるとともに、二者択一に陥らない柔軟な思考の場を保障する授業にしていくことが課題である。



5 成果

昨年度の初めにとった児童アンケートでは、新聞を「よく読む、時々読む」といった肯定的評価は全校で27.2%だった。そこから少しずつ数値が伸び、令和7年の7月には43.6%に向上した。2年間の取組を通して、新聞を読む児童が増えたことがわかる。また、NIE取組初期の頃、児童がよく見るのは「テレビ欄」「天気予報」という回答が多く見られたが、取組を続けるうちに「地域の出来事」「ニュース」など、児童の見る新聞の欄に変化が見られるようになった。児童にとって新聞が身近になり、新聞から得る情報も増えたことがわかる。

全国学力・学習状況調査結果において、令和6年度と令和7年度の国語科正答率を県と比較すると、昨年度は県の正答率を下回っていたが、今年度は県と同等の正答率となった。特に「読むこと」の領域においては、7.1%上昇し、県を上回る正答率となった。日頃から新聞に触れ、「読む」ことで、「読む力」が伸び、このような結果に繋がったと考える。また、国語科において無答の割合が大きく減少しており、学習に向かう意欲の向上が見られた。

児童と職員にとって、新聞が身近になった2年間だった。新聞から得られることや新聞でできること、新聞の可能性を多く知ることができた。そして、それを日々の取組に活かすことができた実り多い2年間だった。これで終わりではなく、2年間で得たことをこれからの児童との活動に活かしていきたい。

(高橋 亜由美)

担当 NIE アドバイザー及び担当新聞通信社からの一言

1 担当 NIE アドバイザー

村上市立神納小学校 校長 小池 満喜子



特筆すべきは、参観させていただいた 1 年生特別の教科 道徳の授業における単元構想である。国語との教科等横断的な学習や内容項目による道徳の単元化により、ゴールを明確にし、児童が主体的に学ぶことができる学習環境を整えていた。そして、新聞活用における工夫が、新聞記事(写真付)の自己選択である。日本と異なる食文化をもつ国の料理に興味をもった児童。その国の人に伝えたいことや自分が感じたことを文に表す活動に取り組んだ。初めて見る 3 か国の料理記事(写真)から、一番興味のある料理記事(写真)を自己選択していた。また、マーカーで読む範囲を限定する「情報の焦点化(トリミング)」やカタカナを平仮名に書き換えるなど、教師の細かな配慮もみられた。記事に書かれてあった唐辛子マークの数から辛さを予想したり、どんな野菜がどのように料理に使用されているのか丁寧に読み取り、感じたことを書き表す姿がみられた。

蓮野小学校の研究主題のとおり、授業における新聞活用を通し、先生方が一丸となって『主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善』に取り組んだ素晴らしい実践であった。

2 担当新聞・通信社

新潟日報社社未来読者推進室長 山田 孝夫



蓮野小学校からいただいた資料に、うれしくなるデータが紹介されていました。全国学力・学習状況調査の結果です。実践・研究委嘱校になった最初の令和 6 年度よりも 2 年目の令和 7 年度の国語の正答率が向上したことが数字で明らかになりました。新聞に触れ、読むことで読む力が伸びたとの分析が記されていました。

インターネット上の SNS などを見る機会が多い中で、子どもたちには情報をしっかり読み解く力を身に付けることが欠かせません。来年度以降もこの力の維持、向上を期待したいです。

公開授業では 5 年生の社会科を拝見しました。「大企業による海外生産がこのまま増え続けていいのか」という課題について自分の意見を表現する内容でした。子どもたちがグループに分かれて、積極的に話し合う姿が印象的でした。研究主題である「主体的・対話的で深い学び」に沿った内容だと感じました。

お忙しい中、聖籠町の全小中学校をはじめ多くの先生方が参加されたのもすばらしい光景でした。